



## 冬の研究渡り鳥 (Winter migration for research)



ヨーク大学心理学科 特別研究名誉教授

ONO, Hiroshi (大野 憊)

Profile—おおの ひろし

1960年、ダートマス大学卒業。1965年、スタンフォード大学大学院修了 (Ph.D.)。ハワイ大学助教授、ヨーク大学助教授、准教授、教授を歴任。2014年、日本心理学会国際賞功労賞受賞。専門は視覚心理学。

昨年、日本心理学会の国際賞 (功労賞) を受賞されたHiroshi Ono (大野 憊) 先生にインタビューし、カナダのヨーク大学に勤務されるようになった経緯や、北米での研究生活についてお聞きしました。(聞き手：櫻井研三)

——先生の個人史を聞かせてください。

4, 5歳の頃に米国に来た理由は、(旧制) 平安中学校の英語の教師をしていて英語を「話せた」父が (笑)、その当時、米国のカリフォルニアにいたことに遡ります。家族全員が米国に引っ越すか、父が日本に戻るか悩んだ末、就学前の私だけを連れて母が渡米して父と相談し、結論を出すことになりました。ところが、渡米してすぐに第二次世界大戦が始まり、私たちは收容所に入れられたのです。

終戦直後、母は日本に残した子どもたちが気がかりで、すぐに帰国を考えました。しかし、父は教師の給料では家族を養えないと考えて米国に残り、私は母とともに日本行きの第一便の船で帰国しました。その船の乗客の中には日本が戦争に勝ったと信じている人もいたのです。米国が負けたのなら、なぜ我々が日本に送り返されるのか、と考えればわかりそうなものですが (笑)。

帰国した時に、私は小学校5年生でした。帰国してみると、家は進駐軍に接收されていたため、そこには住めませんでした。それで

京都に戻るまでの3, 4年は広島県の祖父母の家に住みました。京都に戻って中学を卒業した後、私は単独で渡米しました。ワシントン州の高校に入学し、その後、ニューハンプシャーのダートマス大学を卒業して、スタンフォードの大学院で学位を取得しました。

——大学院での生活はいかがでしたか？

とても楽しかったですよ。スタンフォードでは研究と野球以外、何もしなくてよかったですからね (笑)。博士号を取得した後も、(認知不協和理論で知られる) レオン・フェスティンガーのポスドクとして1年間スタンフォードに残りました。

——最初の教育職はどちらでしたか。

ハワイ大学に勤めました。トロントにいと今でも、なぜハワイから引っ越してきたのかと、聞かれますよ (笑)。トロントでは夏は蒸し暑く、冬は厳寒ですからね。いろいろあってハワイ大学をやめ、ヨーク大学に落ち着きました。大学で教えるようになる前は、もっと多くの大学を転々とすることになるのだろうと漠然と考えていたのですが、私の職歴はここが最後となりました。

——心理学者を目指したきっかけは何ですか。

高校では、数学と物理学に興味を持っていましたが、そちらには進みませんでした。大学1年生の後半はそれらを全く勉強しなかったもので、ついていけなくなったので、

その頃、心理学科のアルバイトでデータ入力をしたのがきっかけで心理学に進みました。もともと心理学を強く希望していたわけではないのです。

——現在までの研究テーマとそれを選んだ理由は何でしょうか。

学部時代には社会心理学者の指導を受けていましたので、学部時代と大学院の最初にかけては、社会心理学の研究をしていました (聞き手注：その頃の業績にはチャールズ・オズグッドやスタンレー・シャクターとの共同研究もあります)。しかし、次第に社会心理学が嫌になってきたのです。その理由は、当時の社会心理学は「だまし実験」が主流で、そのような実験をするたびに、とても居心地が悪い思いをしたからです。結局、私は「ウェーバーの法則」を博士論文のテーマにして知覚研究者となり、ハワイ大学を経て、ヨーク大学に職を得ました。

知覚心理学者としては、ヨーク大学はとても良い環境でした。というのは、当時イアン・ハワードが知覚研究部門を拡大・強化している途中で、多くの知覚研究者が集まりつつあったからです。当時トロント大学は「学習」の研究者を集めていたので、ヨーク大学心理学科は「知覚」の研究者を集めたわけです。多くの知覚研究者の同僚がいたことが、ヨーク大学のとても良い面だったのです。

そこで視方向の問題が私の研究テーマになりました。当時は、仮説的構成概念と媒介変数に関

する議論が盛んでしたが、ヨーク大学に来る前、Howard and Templeton (1966)の本を読んで、サイクロピアン・アイ（キュクロペスの眼）の概念を知り、とても興味を引かれました。それは生理学の仮説的構成概念ではなく、明らかにデータから導きだされた概念だったからです。

また、2度目のサバティカル（研修休暇）でスコットランドのニック・ウェイドのところ滞在了した時期に、ブライアン・ロジャースが運動視差の実験装置を組み立てていました。それでサバティカルから復帰した時に、運動視差の実験に着手してみました。

同時期に、眼球運動の研究もかなり行なっていました。これは視方向の話から入ったのですが、サイクロピアン・アイの概念に適用できるヘリングの法則をもとに、視方向と眼球運動の面白い実験をしていました。もっと眼球運動の実験を続けたかったのですが、他の研究者が使っていた高価な眼球運動測定装置を持っていなかったため、そこから先に進めませんでした。できなかった実験を、死ぬ前にやっておきたいですね。

そのようなわけで、私の研究テーマは、視方向、眼球運動、運動視差と奥行知覚、空間知覚です。

——それらのテーマの共同研究者で影響を受けた人物はいますか。

中溝（幸夫）さんが最初のボスドクでした。彼と一緒に眼球運動測定について（借りた装置で）勉強しました。眼球運動と視方向の問題にさらに関心を向けるようになったのは、中溝さんとの共同研究があったからです。

同僚の中では、スタインバックと一番多く共同研究をしました。影響を受けたというわけではありませんでした。それと、齋田

（真也）さんとOHPを利用したグラレーティング生成装置を作ったり、スタインバックと別なタイプの運動視差ディスプレイを作成したりしました。

——実験結果でとても驚いた経験というものがありますか。

いつも本実験でデータをとる前に予備実験を十分にすることで、驚いたという経験はありませんね。予備実験をしておくことで、どのような実験結果が得られるかは予想がつかます。要は、最終的に論文化することを見据えて、どのような実験デザインや実験条件が最適かを決めておくことです。まあ、それでも予想外の結果が出たら驚きますが（笑）。

——どの研究あるいはプロジェクトが一番楽しかったですか。

レオナルド・ダビンチについての論文を出しましたが、これは他の研究とは違って印象に残っています。参考文献としてダビンチに関する本を7冊読んだのですが、これは面白かった。普段とは全く違うモードに切り替え、伝記本を集中的に読むという一番楽しい時間をすごせました。なにしろ心理学の本じゃないからね（笑）。

——研究の楽しかった側面と、北米以外で楽しい経験をした場所を教えてください。

どの場所もそれぞれ楽しいことがありました。とにかく景色の違う場所を訪れて、それまで知らなかった研究者たちに会い、彼らの研究に触れて新しいテーマに取り組むのは楽しかったですね。その意味で、スコットランドはよかったです。スコットランド滞在中でニック・ウェイドと深いつながりができましたし、それまで私自身は関心がなかった心理学の歴史に彼はとても造詣が深く、互いに補い合いながら何本かの論文を完

成させました。その中でも、ロックフェラー基金の招きでイタリアのコモ湖畔にあるバラッジオに、ニックも私も家族と共に一ヶ月滞在し、論文を書いたのは素晴らしい経験でした。

——ほとんど毎年冬になると渡り鳥のように来日され、つくばの産総研やATRに滞在されていましたね。日本の研究者との交流についてお聞かせください。

私に加わっていたヨーク大の視覚研究グループでは、イアン・ハワードが大きな研究費を獲得し、それを利用して授業負担を軽くできたので、とても運が良かったと思います。少なくなった自分の授業を半期に集中させて、残りの半期は研究に集中しました。それで、ほとんど毎年日本に行くことができたのです。そうでなければ、外に出て研究するという機会はサバティカルの時くらいしかなかったでしょう。

つくばには齋田さんが招聘してくれました。ATRには、最初に佐藤（隆夫）さんが招いてくれて、翌年からは当該の研究部門が招聘してくれました。冬に来日したのは、トロントより京都のほうが暖かいからです。仙台はトロントより寒く感じたことがありますが（笑）。

——日本滞在中の生活を教えてくださいいただけますか。

もちろん、日本では研究三昧でした。仕事以外では、ATRに近い奈良に住んでいた姉によく会いにいったので、とてもよかったです。手料理をご馳走になった上に、洗濯までしてもらいましたからね（笑）。

それと、私は京都生まれですから、子どもの頃に住んでいた家や通っていた中学校をよく見に行きました。昔遊んで歩いた嵐山やそ

の周辺を散策して、その頃の記憶を取り戻しました。

——テクノロジーの進歩が先生の研究に与えた影響について聞かせてください。

テクノロジーの進歩には、随分と昔についていけなくなりました(笑)。学部生の頃は、決して上手ではないものの、機械語でコンピュータのプログラミングをしていたのですが、大学で教えるようになってからは、すっかり離れてしまいました。というのも、共同研究者、特にポスドクが皆さん有能で、プログラミングをはじめ、技術面も含めて何でも自分でやる人ばかりでしたから。当然私は、そちらの方面の怠け癖がついてしまい、プログラミングなどはすぐに追いつかなくなりました。テクノロジーの面では、今の私は「(進化の過程から取り残された)恐竜」で(笑)、何をどうすればいいのか、さっぱり見当がつかない状態です。

——それでも、パソコンの導入は先生の研究に大きな変化をもたらしたのではないのでしょうか。

はい、パソコンは、いろいろな面で変化をもたらしました。例えば、昔は手書きの原稿を秘書に渡してタイプしてもらっていました。それを受け取って校正し、またタイプしてもらうことを繰り返して論文を書いていたわけです。ところがパソコンを使い出したら、タイピングから何から全部自分でやる羽目になりました(笑)。先程お話ししたように、研究の分野ではテクノロジーの進歩に取り残されたので、ポスドクや客員研究者が面倒を見てくれました。

——研究ではなく教育におけるパソコンの導入についてですが、先生が作成された心理物理学の初學者向けアプリ「三種の心理物理学

的測定法でみる精度と確度」についてお話しいただけますか。

このアプリを思いついたのは、息子が高校をやめて自分でソフトウェアの会社を立ち上げたので、何か仕事をさせてやろうとしたのがきっかけでした。その後このアプリは、大倉(正暉)さんと櫻井さんによるハイパーカード版を経て、現在のウェブ版になりました。もともと、心理物理学を教えるのは大変で、何より内容が退屈なため、私の講義では学生はすぐに寝てしまいました。その意味では、このアプリには随分と助けてもらいました。

——今の若手研究者にアドバイスをいただけますか。

何より若手研究者の皆さんの幸運を祈っています。私は若い人にアドバイスできるほどの仕事はしていないと思いますし、まだ自分の研究の全体像も見えていません。どちらかといえば、ある実験から生まれる小さい問題を取り上げて、それを実験で解明すると、また次の問題が生まれてくるので、それをまた実験で解明する、そういう研究スタイルをとってきました。

それでも自分自身のことを振り返ると、自分が興味を持てるテーマを選びなさいということでしょうか。なにしろ、長期間そのテーマと向き合って論文を書き上げるのですから、興味を持ってないテーマでは最後までやり通せないでしょう。

私は、研究をする場合に芸術家をモデルにします。それは、ダビンチやピカソのような天才のことではありません。ほとんどの芸術家の作品は、本人が亡くなるとすぐに忘れ去られるでしょうし、それは研究者である私の業績についても同様でしょう。芸術家を引き

合いに出したのは、どのような研究をするにせよ、自分がピカソやダビンチではないと思うなら、実験デザインにしても論文の文章表現にしても、それらをできる限り美しくしようということです。

結局のところ、知覚の領域だろうと他の心理学領域だろうと、自分が興味を持てるテーマを研究すること、そして、その研究のデザインや論文の文章をできる限り美しく仕上げる努力をすることが大事なのです。

私はまだポスドクを受け入れません。もし学振PD等で私との共同研究を希望される方は、連絡してください。

——最高のアドバイスをいただきました。本日は、長い時間ありがとうございました。

注：インタビューは日本時間で2015年7月17日22時30分からSkypeを使用して約1時間30分にわたり行われた。Ono先生の研究室に滞在中の下野孝一教授(東京海洋大学)が同席した。



日本心理学会第78回大会での国際賞受賞記念講演後の懇談。左からHiroshi Ono先生、佐藤隆夫先生、櫻井研三。

#### Profile—さくらい けんぞう

東北学院大学教養学部人間科学科教授。1986年、東北大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程単位取得退学。2004年、博士(文学)。専門は知覚心理学。